

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ

新潟県十日町市産業観光部 部長
渡辺 正範



1 越後妻有^{つまり}とは

越後妻有は、新潟県信濃川流域の南部、十日町市と津南町のエリアを総称するもので、「妻有」は中世からの呼称です。面積は約760 km²で東京23区の1.2倍あり、そこに約6万7,000人が暮らしています。過疎高齢化の進む典型的な中山間地域で、積雪が市街地でも3mを超えることがある、世界でも有数の豪雪地です。

そんな雪の中から縄文文化が花開き、今から約5,000年前の縄文中期には、縄文の華と呼ばれる火焰型土器を生み出しました。十日町市笹山遺跡出土の土器群は、縄文土器としては唯一国宝に指定されています。

稲作が始まると里山に分け入って棚田を耕

し、通年で高い湿度を利用した機織りに勤しむなど、独特な文化・産業を育ててきました。それが、現在の魚沼コシヒカリ、そして着物の産地として受け継がれています。

しかし、東京一極集中が進む戦後の高度成長期やバブル期には、他の多くの地方と同様に、過疎と高齢化に拍車がかかりました。一方で、大規模な開発や環境破壊がなかったため、ありのままの里山の暮らしと日本の原点のような風景が、そのまま残っている地域でもあります。ただ、その価値を生かし切れていなかったことが、「大地の芸術祭」に挑む要因になりました。



イリヤ&エミリア・カバコフ：棚田

2 大地の芸術祭とは

大地の芸術祭 Echigo-Tsumari Art Triennale は、この越後妻有の里山を舞台に3年に一度約50日間開催される世界最大級の国際現代美術の祭典で、2000（平成12）年にスタートしました。

「人間は自然に内包される」を基本理念として、里山の自然・風土・文化を、現代美術を媒介にして掘り起こし、地域・世代・ジャンルを越えた人々の協働を通して魅力を高め、世界に発信する地域創生の取り組みです。

主な内容は、作家と地域住民の協働による作品制作やワークショップ、パフォーマンスイベントなどで、運営には、都市の若者や外国人も多く関わっています。

3 発端は「ニューにいがた里創プラン」

1994（平成6）年、平山征夫新潟県知事（当時）の提唱で、広域市町村が連携して行う個性的な事業に対して県が支援することで、広域連携と地域活性化を目指す事業として「ニューにいがた里創プラン」がスタートしました。10年間で事業費の約40%（最大6億円）を県が支援するもので、当時6市町村で形成していた十日町地域広域市町村圏（現十日町市・津南町＝越後妻有）が、この地域指定を受けました。

初めから、現代美術をテーマに据えていたわけではありません。食や雪、伝統文化などを核として検討していく過程で、これらすべての資源の付加価値化を図るツールとして「アート」が有効なのではないかという発想から、「越後妻有アートネックレス整備構想」が生まれました。

基本理念：人間は自然に内包される
目的：情報発信、交流人口増加、地域の活性化
主要事業：
(1)越後妻有8万人のステキ発見事業

(1998～1999)

(2)花の道事業（1998～2003）

(3)ステージ整備事業（1998～2003）

(4)大地の芸術祭事業（2000～継続中）

4 マイナスをプラスに

上記の主要事業のうち、現在まで実施されているのは(4)の大地の芸術祭事業ですが、(1)～(3)の事業は、芸術祭を展開していくための意識醸成や起爆剤とするために実施されました。

空家や廃校、耕作放棄地も含めた棚田、空き地など、ふだん地域にとって負のイメージを持つ空間が作品展開の場となるため、これらの価値や潜在的な力を再認識する必要があったからです。マイナスの財産を、アートの力を借りてプラスの財産に変えていくためには、必要なステップでした。

とはいえ、それだけで物事がうまくいくわけではありません。何しろ、20世紀末当時は「芸術＝金持ちの道楽」、「現代美術＝理解不能」という認識がまだまだ根強く、まして中山間地域に展開して地域づくりになるなどと考える人は、ほとんどいなかったのです。

5 ぶれない思想と対応

そんな中「これこそが21世紀の地域づくりの核になる」と説き、理念の浸透と実現化のプロセスを示して議論をリードしたのが、現在も総合ディレクターを務める北川フラム氏です。北川氏は、里創プラン事業の方向が文化面に向かっているときに構想に加わり、そのまま総合コーディネーター（当時）として、芸術祭の総監督の役割を果たしています。

事業初期は、「理解できない」、「そんなことは必要ない」、「地域を破壊する」など、疑問や反対の意見が噴出しました。しかし、現代美術は社会の矛盾や自然の危うさをあぶり出すとともに、人の未来への希望も示すことができる」と根気よく熱心に説くことで、次第に

特集2 アート（文化芸術）によるまちづくり

理解を得ていきました。この「ぶれない思想と対応」があったからこそ、大地の芸術祭は動いていったと言えるでしょう。

6 組織運営とサポーター

大地の芸術祭は、構成自治体と地域内の各種団体からなる実行委員会で意思決定、運営されています。大地の芸術祭実行委員会は1998（平成10）年7月に設立され、実行委員長は十日町市長、副実行委員長は津南町長、名誉実行委員長は新潟県知事となっています。総合プロデューサーには福武總一郎氏、総合ディレクターには北川フラム氏に就いていただき、委員として商業組織、交通や旅館などの団体、地域自治組織など地元の様々な団体が参画しています。

実際の現場では、市・町の担当セクションと「NPO法人越後妻有里山協働機構」が事務局・運営本部となり、集落や各種団体、自主運営の組織等と連携して事業全体の管理・運営に当たっています。そして、これら全般にわたって活躍するのが「こへび隊」です。こへび隊は、主に首都圏の若者を中心とするサポーターで、アーティストをフォローする作品制作はもとより、作品管理、案内、ツアーガイドなど多岐にわたる活動を、地域住民との協働の中で展開しています。また、会期以外でも農作業や除雪、祭礼参加など地元に関わり込む活動を行っていることから、年間を通じて地域とのつながりが深くなっています。

7 作品の力と地域の魅力

こうして生まれた作品は地域の特別な存在＝財産となり、自然、集落、地域の中に溶け込んでいきます。制作に住民が加わることで、そして、その場所でなければ作品が成立しないことが、通常の美術展と異なるところです。

これが、「作品が周りの自然や環境の魅力を引き出す」「集落や場所の力が作品に輝きを与える」ことにつながり、鑑賞者に新鮮な感動を与えることになっていると思います。



地域のお年寄りと都会の若者が一緒に作品制作



完成した作品 スー・ペドレー：はぜ

8 大地の芸術祭の効果

大地の芸術祭の来訪者は、2000年の第1回展の約16万人から第6回展の約51万人へと約3倍に増えました。参加集落も28から110へと約4倍に伸びています。これは、集落全体の約半数にあたります。来訪者男女比は、女性65%に対して男性35%、年代別では、20代と30代で過半数を超えます。言い換えれば、若い女性から高い支持を受けている催しということになります。

経済波及効果も、第6回展では新潟県全体で約51億円にのぼり、景気動向に寄与する規模になってきています。

大地の芸術祭の実績

回数	開催年	入込客数	参加集落	作品数
1	2000年	162,800人	28集落	146作品
2	2003年	205,100人	38集落	224作品
3	2006年	348,997人	67集落	329作品
4	2009年	375,311人	92集落	365作品
5	2012年	488,848人	102集落	367作品
6	2015年	510,690人	110集落	378作品

そのほか、芸術祭の効果といわれるものには以下のようなことが挙げられます。

○交流人口の増加と地域ビジネスの創出

わずか5軒の集落に1万人を超える人たちが訪れるようになり、地域のおかあさん達による農家レストランが人気を博す例も生まれました。

○住民同士、来訪者、諸外国との連携機会拡大

芸術祭で知り合った住民同士も多く、駐日外国大使館との交流に地区全体で取り組んでいるところもあります。

○デザイン性の高い商品の創出とブランド化

商品のパッケージを一新する「リデザインプロジェクト」で数々のデザイン賞を受賞することなどにより、売り上げを大きく伸ばした商品も数多く生まれました。

○他分野への波及（福祉や健康など）

福祉作業所で生産するお菓子が土産品コンテストで最高賞を受賞し、売り上げを大きく伸ばしたことにより、利用者が自活するための資金に結びついている例もあります。

○地域の誇り醸成と移住者の増加

都市から地方へ居所を移し地域のサポート活動を行う「地域おこし協力隊」や市職員などへの応募動機に、「大地の芸術祭に関わりたい」というものが多くなっています。

9 継続への課題

ここまでの記述を読むと順風満帆に見えますが、やはり課題もたくさんあります。

○安定的な財源の確保（助成や寄付協賛、自主財源）

○作品の維持管理・改修（多くの作品、多額の維持費）

○地域全体への波及（地区によって大きい温度差）

○受入体制の整備（二次交通や案内、インバウンド）

これらはみな、一気に解決することが難しいものばかりです。地道に取り組む必要があります。

10 結びに

21世紀、とりわけ東日本大震災以降、日本とそれを構成する地方、地域は、これまでの価値観とは大きく異なる視点でまちづくりを進めなければならない岐路にあると思います。

「人間は自然に内包される」という大地の芸術祭の基本理念は、ここに臨んで重要だと考えます。人も文明も芸術も、自然とともに歩んでこそ生きるということを、いま実感できるからです。

芸術の力で地域づくりを進めることは「芸術本来の道ではない」という議論もありますが、「アートが地域の力を引き出し、地域がアートを育てる」ことも、越後妻有の人たちは知っています。

これまでの歩みを検証し、地域全体を里山現代美術館として内外に発信していく活動を、これからも続けていきたいと思っています。



田島征三：絵本と木の実の美術館

著者略歴

渡辺 正範（わたなべ・まさのり）

1958年生まれ。1985年中魚沼郡川西町（現十日町市）入庁。2005年の合併後も含めて、企画・広報・教育・産業・観光などの分野を担当。

1994年から「ニューにいがた里創プラン」ワーキングチームに参加し、大地の芸術祭の企画から2000年の「第1回大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」開催まで担当。2009年の第4回展と2012年の第5回展では作家として作品を発表。2011年から2013年まで大地の芸術祭実行委員会事務局長。2014年から担当部長。